慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『暮しの手帖』と私
Sub Title	Kurashi-no-Techo : eine Zeitschrift als Inspirationsquell und Lebensbegleiter
Author	森, 泉(Mori, Izumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.54 (2017.) ,p.105- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	理工学部最終講義
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20170331-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

理工学部最終講義

『暮しの手帖』と私

森　　泉

本日は，私の最終講義にお越しくださいまして，ありがとうございました。

本日の講義では，ドイツ語の話はいたしません。私の研究について触れることもありません。今日は，私自身について少しお話ししてみたいと思います。正確に申し上げれば，私の読んだ本と，その関わりを中心にお話します。本の紹介を除いては，私の個人的な読書にまつわる体験を，授業中お話したことはほとんどありませんでした。今日の話題は，私の専門に直接関わることではありませんが，私の教育研究に全く関係ないかというと，そうではありません。むしろ，そういった活動の背景となる部分をお話することになりますので，話をお聞きになって，かつての私の発言の背後にあるものや，隠された意図が伝わることになれば，私としてはたいへん嬉しく思います。

*

講義を始めるに当たって，一つお断りをしなくてはなりません。「暮しの手帖と私」というタイトルは，事務局からお問い合わせがあった折，頭に浮かんだものをそのままお伝えしました。しばらく経って，このタイトルが暮らしの手帖社社主を長い間務められ，3 年前お亡くなりになった，大橋鎮子さんの御著書の題名と同じであることを思い出しました。真に迂闊な話です。その時点でタイトルを変えることも考えましたが，あくまでも私のささやかな最終講義のタイトルという性格を思い，敢えて変えるこ

とはせず，そのまま使わせていただくことにします。その点はご了承ください。

*

読んだ本とその影響について語るとき，多くの場合挙げられるのは，思春期の読書であろうかと思います。一方，それと並んで，幼少年期に慣れ親しんだ本の影響の大きさも無視できません。思春期の読書が「思想」とか「人生観」など，その後の生き方に影響を与えると思われるのに対して，幼少年期の読書は，プリミティヴな意味での「ものの見方，感じ方」，あるいは「行動様式」「好き嫌い」といった，より基本的な，本人の感性に半ば肉体化するような影響を与えると思われます。今日の私のお話は，主に後者，すなわち私の幼少年期の読書体験が核となることをまず申し上げておきたいと思います。

*

私の世代には良くあるケースだと思いますが，私の読書体験も「岩波の子どもの本」から始まりました。このシリーズは，現在もなお刊行されておりますので，ものによってはたいへんなロングセラーということになります。このシリーズで当時刊行されていたものは，ほとんど読んだと思いますが，中でも一番のお気に入りがこの本でした。〔図版 1（P.107）〕

今，ここにお見せしているのは，初版本で出版年が昭和 29 年となっています。出版された年，私はまだ 3 歳ですから，はじめは父や母に読んでもらっていたのでしょう。テレビのなかった当時，読み聞かせというのは日常的なことで，夜眠る前，布団に入ってから本を読んでもらうという子供は，私の周囲にもかなりおりました。

*

本が自分で読めるようになり，このシリーズも卒業して次に手にするようになったのが「岩波少年文庫」でした。これも私の世代ではお定まりのコースの一つかもしれません。このシリーズで一番のお気に入りがこれでした。〔図版 2（P.107）〕

図版 1：『ちいさいおうち』

図版 2：『くまのプーさん』

「くまのプーさん」と続編の「プー横丁にたった家」も繰り返し，繰り返し読みました。すっかりボロボロになって，現在は手元にはありません。写真のものは後に単行本として出版された大型版です。

＊

時期的にはしばらく後になりますが，「プーさん」と同じくらい気に入って読み返したのがこの本です。〔図版 3（P.108）〕

メアリー・ポピンズのシリーズは，後に知り合いの子供にあげてしまったような記憶があり，やはり手元にはありません。画面のものは比較的最近，懐かしさもあって手に入れた英語版です。

＊

さて，こういった本と並んで幼少年期の私が愛読していた本が，『暮しの手帖』でした。〔図版 4（P.108）〕

この雑誌をめぐっては，先年テレビ・ドラマのモデルになったこともあり，花森安治という極めて個性的な編集者が，独裁的とも言える編集長権限をふるって作り続けた総合家庭雑誌であることは，多くの方がご存知のことと思います。これからお話するように，私はこの雑誌から大きな影響

図版３：『メアリー・ポピンズ』

図版４：『暮しの手帖』

を受けました。むろん幼かった当時，全ての記事を読んでいたわけではありません。この本との付き合いは，幼少年期を超えて大人になるまで続くので，読み方も年齢相応に変わっていったのは，もちろんのことです。

＊

『暮しの手帖』との出会いは，藤城清治による影絵の挿画が入った童話に始まります。〔図版５（P.109）〕

ほぼ毎号掲載されていましたので，私は本が届くと，すぐにその部分を母に読んでもらっていた記憶があります。『暮しの手帖』は，当時の雑誌としてはグラフィックで綺麗な雑誌だったので，少し長じてからは，影絵付の童話を読んでもらうばかりではなく，一人でパラパラとめくりながら子供なりに楽しんでいました。また，美味しそうな料理が出ていたりすると，作ってくれるように頼んだりしていた記憶があります。

＊

そういった出会いの後，私が『暮しの手帖』をより積極的に読むようになった切っ掛けが，余りにも有名な商品テストの記事でした。小学校４年

図版 5：藤城清治の影絵

生くらいの頃からだったと思います。非常に分かりやすく書かれていたので，小学生の私にも十分に理解することが可能でした。とにかく面白かった。ある製品の，どこがどんな風に良く，また悪いのか。使い手の立場に立ったとき，どういう問題が起こるかなどを，写真と共に具体的，克明に描写して，何よりも多くの「何故？」について答えてくれているところが，謎解きにも似た面白さがありました。

＊

このように，商品テストの記事に夢中になった理由として，当時，私がどんなことに関心を持っていたかも無関係ではないので，その点について少しお話しておいた方が良いかもしれません。

現在の私しかご存知ない方には想像できないことかもしれませんが，子供の頃の私は熱心な理科少年でした。科学全般に興味がありましたが，メカニックなものに特に興味があって，色々工夫してものを作るのが大変好きでした。模型を作ったり，色々なキットを組み立てたりするのは勿論，なにやらあやしげな図面を引いて，いっぱしの設計をしたつもりになったり，「改良」と称して家の道具を壊して叱られたりしておりました。父か

らエンジニアという言葉を教わり，その言葉に憧れて，大人になったら絶対にエンジニアになるのだ，と固く決心していました。この決心は，残念ながら高校1年のころ数学があやしくなり，高校2年の物理，化学で壊滅的な打撃を受けて以降，もろくも崩れ去ることになります。

＊

『暮しの手帖』に話を戻しますと，少年の私にとって商品テストは格好の読み物でした。言ってみれば，私にとっては理科の教科書みたいなものでした。対象があり，テストの目的と方法が述べられ，それが極めて分かりやすく，納得のいく方法で行われるのですから。

＊

後年，これとよく似た視点で色々な道具を俎上に載せてコメントした本に出会い，とても面白く読みました。おそらく，私くらいの世代ではご存じの方も多いと思いますが，佐貫亦男の「道具の再発見」という本です。

『道具の再発見』

講談社のブルーバックスに収められていました。佐貫亦男は航空機のプ

ロペラの専門家でしたが，戦後，航空機はジェット機の時代に変わり，風速計などの開発に関わったり，比較設計学といったような分野の研究に従事されたようです。この本では，具体的な商品というよりも，ドアのノブ，窓枠，窓の蝶番，封筒を留めるピン，椅子の形態，万年筆のクリップなどに注目しつつ，滞在経験の長いドイツで見かけたスグレモノを採り上げて，エンジニアの観点から，どこが優れているかを説いたものです。その着眼点と説明は，今読んでも興味深いものです。ただ，そこで扱われている対象が40年前のものということもあり，残念ながらこの本は現在では絶版となっています。

*

再び『暮しの手帖』に話を戻しますと，商品テストの熟読に始まり，年齢が上がるに応じてその他の記事も読むようになりました：家庭雑貨に関する記事，料理に関するもの，ファッション，フォト・ルポルタージュ，そして花森安治のコラムやその他のエッセイ，投稿記事などです。その点では，『暮しの手帖』は幼少年期に始まって，思春期から大人になるまで私に影響を与え続けたとも言えると思います。

この雑誌から少年期に受けた影響というと，まず「暮らし」自体が内包する面白さに目を開かれたことが挙げられます。ごく普通の生活の中にも，如何に面白い事柄がたくさん詰まっているかということを知ったことは，その後の私の人生に大きな影響を与えたと思います。さらにモノ，特に道具へのこだわり，そして具象的な思考法ということだろうと思います。最後の具象的な思考法とは何かと問われると，いささか説明しにくいのですが，具体的なモノを通して物事を考える，簡単に言ってしまえば，具体的な状況の中でモノを考えるということです。この傾向は，今もかなり根強く私の中に残っていると思います。

*

ところで雑誌の編集に際して，毎号，最初のページから最後のページまで，くまなく赤ペンで修正の筆を入れたといわれる花森安治の徹底した仕

事ぶりは，しばしば「職人」という言葉で特徴づけられます。例えば，東大の『帝国学生新聞』時代の仲間で『週刊朝日』の名編集長と謳われた扇谷正造は，花森の仕事ぶりを次のように評しています。

「職人はたえずモノを考え，手を動かし，何かを作っている。花森君もまさにそうだった。『暮しの手帳』には隅から隅まで目を通した。亡くなる直前までそうだった。」

また，花森自身も，

「雑誌作りというのは，どんなに大量生産時代で，情報産業時代で，コンピューター時代であろうと，しょせんは〈手作り〉である，それ以外に作りようがないということ，ぼくはそう思っています。だから，編集者は，最も正しい意味で〈職人（アルチザン）〉的な才能を要求される，そう思っています。」

と述べています。

ただ，私にとっては，ここで言われている花森安治の職人性というのが，雑誌編集という枠を超えて一つの思考の在り方にまで及んでいる点こそ，私自身に大きな影響を与えたような気がしてなりません。手を使って考える，手でつかみ取った現実を通して考える，という思考法が私にはどこか染みついているように思えます。モノに即した具象的な思考と，それを超えた抽象的な思考，この二つは物事を考える上で共に大切なものですが，どちらかというと私は抽象思考が苦手です。極端な言い方をすれば，私は知性によって思考している，というよりは，五感を通して思考しているといった方が実態に近いような気がしています。

＊

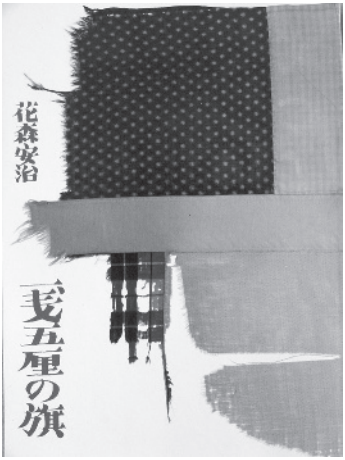
このような傾向が，子供の頃，色々機械をいじったり工作したりするのが好きだった私には，元々体質的に備わったものだったのか，それとも『暮しの手帳』によって培われたものなのかは微妙なところです。少なくともこの雑誌を読むことにより，私のその傾向が強まったのは確かなようです。

*

多少研究に絡めて言うと，近年になってある親しい同僚から認知言語学のことを色々と聞くようになって，非常に興味を惹かれました。どこに惹かれたかというと，メタファーが人間の認知には重要な役割を果たしているという点です。メタファーには，一つの重要な機能として，抽象的な概念を具象的なイメージによって可視化する，目に見えるようにするという働きがあるからです。それに気づいたとき，私は自分の思考が全てメタファーで出来ているのではないかと思ったくらいの，感慨と親しみを覚えました。

*

花森安治は反戦の人，非戦の人でもありました。1960 年代半ばから 70 年代を通して，『戦場』，『無名戦士の墓』，『武器を捨てよう』，『くにを守るということ』『見よ ぼくら一銭五厘の旗』といった一連の文章を，花森安治は署名入りで『暮しの手帖』誌上に掲載しました。学生だった私は，こうした文章を大いなる共感を持って読みました。これらの文章は，その他の文章も加えられて，後に『一銭五厘の旗』という本に纏められます。



『一銭五厘の旗』

ごく初期を除いて，花森安治は自著を出版しておらず，この時期にこのような本を出版したのは，重い病を経験した自分の命がこの先あまり長くない，という切迫した思いと，花森を取り巻く時代環境があったと思われます。こうした彼の思いと，具体的なものに寄り添って考えるということの大切さを前面に押し出した形で，1969 年に『暮しの手帳』第 96 号『戦争中の暮らしの記録』が出版されます。

『戦争中の暮らしの記録』

これは全国の読者から寄せられた，戦時中の生活記録 1700 編から，140 編を選んで掲載したものです。ここにはそれ以外の文章は一切掲載されていません。

＊

正直にお話すると，この号が出版された当時，私は今一つこの特集に関心をもてなかったし，事実ほとんど読まなかったのです。一つには余りに表層的な理由で恥ずかしいのですが，読ませる文章が少なかったということと，それ以前に，とても読みにくかったということ。つまり，普段の『暮しの手帳』の文章のようには惹きつけられなかったということです。

色々な読者から書き送られた生の原稿の集まりですし，特に今まで自発的に文章など書いたことのない人の原稿も多く，編集部も意味が取れる限りはそのまま載せたということであれば，読みにくいのは当然のことなのです。『戦争中の暮らしの記録』編集の意図は理解できましたし，その趣旨にも賛同できましたが，具体的な記事を目にして，何となく読む気になれなかった。もし，反戦平和ということを訴えるのであれば，それに先立って，花森自身が書いた『武器を捨てよう』とか『くにを守るということ』といったような切れ味の良い文章を載せる方が，ずっと社会に対してのアピール力がある，そう思ったわけです。これは，若気の至りでした。

*

もう一つ，当時，はっきりとは意識していませんでしたが，この本に関心が持てなかった隠れた理由がありました。私は昭和 26 年の生まれです。戦争が終わって 6 年経ち，少しは世の中も落ち着き始めてはいましたが，まだまだ戦後色の濃い時代でした。周りにいる大人たちは，程度の差こそあれ皆が戦争体験者でした。私は東京の世田谷で育ちましたが，住んでいた町の外れには戦災を受けた建物が未だ手も付けられず無残な姿をさらしていたり，赤土の崖には，にわか拵えの防空壕が残ったりしていました。町に出ると，援助の寄付を乞う傷痍軍人の弾くアコーディオンの，もの哀しい旋律が流れていました。そして，周りの大人たちからは，色々な形で戦争体験を聞かされました。『戦争中の暮らしの記録』に書かれていたことの多くは，私にとってすでに何らかの形で耳にしていた事柄だったのです。それは当然のことながら，決して聞いて楽しい話ではありませんでした。私は，この本に改めてそれらの事柄が書かれているのを目にして，無意識に避けていたのかもしれません。身近な日常の下に隠れている，リアルで忌まわしい記憶の数々。戦争への嫌悪とは，即ち語り聞かされたそのような事態への嫌悪でした。だから読みたくなかったのだと思います。しかしながら，嫌というほど聞いたこれらの戦争中の話も，数十年後には自分の中ですら記憶としてどんどん薄れてゆくものだということが，当時の

若い私には実感できなかったのです。

＊

戦争の記憶ということでもう一つお話しすると，私の母方の曽祖父は広島の原爆で亡くなりました。当時一人で広島に住んでいた曽祖父は，原爆で潰れた家屋の下から這い出して，三日後に亡くなったそうだ，と聞かされました。ここで「亡くなったそうだ」と伝聞態なのは，当時母は両親・兄弟と共に東京に住んでおり，身近な家族は誰一人原爆の地獄絵を目撃していないからです。曽祖父がどのように埋葬されたかも分かっていない。伝聞といっても，おそらくは又聞きの又聞き，というくらいのことだったと思います。曽祖父の最期を目撃した人も，おそらくは前後して亡くなったに違いありません。子供の頃，祖母や母からその話を聞かされてとても怖い想いを抱きました。その後，無残な原爆被災の写真などを目にするようになり，私にとって広島は近づきにくい場所になりました。この 65 年間の中で広島を訪れたのは 2 回。1 回目は修学旅行で，コースの一つとして原爆記念館を訪れたとき。この時は，記念館と原爆ドームを見た後は，すぐに別のグループに合流して市内を去りました。そして 2 回目の広島訪問は，それから 47 年後，昨年 11 月のことでした。それくらい，広島は私にとって遠い所，訪れることを躊躇する場所だったのです。今回は別の用件で広島を訪問したのですが，直前まで曾祖父被爆の地を訪れるかどうかについて，迷っていました。実際に行く段になって分かったことは，曾祖父（母にとっては祖父母）の家があった場所が，現在の平和公園内国際会議場の近くだということ。爆心地から距離にして 5 ～ 600 メートルくらいでしょうか，想像以上に爆心地に近いことに驚きました。当時は壮麗な姿を見せていた県立物産陳列館（現，原爆ドーム）を，祖母や母は，里帰りの度に朝な夕な眺めていたのだろうと思うと，不思議な気分でした。

＊

この他，東京大空襲の時の話とか，色々聞いてはいました。ただ，恐ろしいもので，それらについての記憶は年と共にディティールを失ってゆき

ます。一つには，それが自分自身の体験ではなく，他人から聞いたことだからかもしれません。中世ヨーロッパでは，人々は重要な約束事をした後，そのことを忘れないために，その場に居合わせた同士で殴り合って記憶を身体に刻み込んだと言われますが，体験していない記憶は年と共にディティールを失って，抽象化していくような気がします。概念化していくといっても良いのかもしれません。これは，自ら体験した記憶でさえ起こりうることです。

今，この場で，戦争の記憶に関わる話を長々とするのも，当時あれだけ聞かされて，怖い思いをし，忘れがたい記憶として自分の中に残ったようなものでも，時間の経過と共にどんどん薄れてゆくという事実を，最近如実に感じるからです。60 年も経ってからようやく，自発的に曾祖父が被爆したという地に向かうことが出来たのも，年を取ることによって，物事が子供の頃より冷静に，別な言い方をすれば冷淡に眺められるようになったことに加え，記憶の生々しさが消えかかってきたからだろうと思っています。

*

記憶と思考は同じものとは言えないかもしれませんが，繋がる部分はあります。最近，気になることの一つが，戦争というものが限りなく実体を失って，抽象化，概念化しつつあるように思われることです。極端な例としては，戦争も政府の取り得る政策の一つの選択肢と感じさせるような意見が聞かれることです。先程，具象的思考と抽象的思考の話をしました。抽象的思考の利点は，目の前の細々とした事実にとらわれず，見通しの良い思考が出来る点にあります。一方で，抽象的思考では具象的思考に見られる個々の事実が捨象されてしまうため，一見いかにもスマートな議論に転化されてしまう危険性があります。抽象的思考と具象的思考，どちらがより重要ということは言えませんが，思索というのは，リアルな記憶を伴うことによってこそ深められると思います。私自身が具象的な思考に惹かれるだけに，一層そのことを強く感じるのかもしれません。

『戦争中の暮らしの記録』発刊当時，その意義を余り実感できなかった私も，年を取って自分の記憶も曖昧になってくる現在，コンセプトばかりでなく内容自体も，あれは良い企画だったと思っています。単純に戦争の悲惨さを同時代の我々にアピールすることではなく，あったことを素朴に書き記すことで見えてくる現実の姿を，当面の読者の関心や利害を超えて，将来に残すことこそが，あの本の役割だったことを今更ながら再認識いたしました。

*

さて，最後に，私自身が『暮しの手帳』から触発されたもう一つの大きな影響に触れて，この講義を終えたいと思います。それは，先程もお話ししたように，我々の暮らし，日常生活への強い関心と愛着です。

私は，言語学，具体的にはドイツ語を研究の主なフィールドとしていますが，実は大学院に入った当時は，文学を研究しようと思っておりました。具体的にはシュティフターという作家の研究をしようと思っていたのです。ドイツ語関係の方なら，この作家の名前はご存じと思いますが，一般には知られていない作家だろうと思います。ボヘミア生まれのオーストリア人で，19 世紀初頭に生まれ，ドイツの市民革命とも言える 1848 年の 3 月革命の挫折を経験した後，プロイセンの主導によるドイツ統一前の 1868 年に亡くなりました。長編 2 編の他，多くの中編，短編小説を残しました。ニーチェのように高く評価する向きがあるものの，一般にはこの作家の小説は退屈であると評されております。また，ある種の教育的といいますか，部分的にやや説教調ともとれる語り口が鼻につかないこともありません。では，なぜ私がこの作家の研究をしようと考えたのか。それは，この作家の日常的なものへの細やかな愛情と関心が私を惹きつけたからです。作品の展開に見られる退屈さと引き替えという面も無くはないのですが，作品中に細密画のように描かれる日常生活は，実に豊かで生き生きとしていて美しい。いわば『暮しの手帳』の精神に通ずるものが私を捕らえた，ということだと思います。

*

このような，暮らしや日常性への強い関心，こだわり，愛着といったものも，研究者としての私にとって，実は弱点ではないかと思うことがあります。時と場合にもよりますが，私は自分の本性から考えると，おしなべて研究のために生活を犠牲にすることは出来ないと思います。むろん短期的には，私でも全てを忘れて，目前の研究に打ち込むことはありますが，自分の一生の大部分を研究に捧げるという，ストイックな生き方はできそうにありません。そうできたら格好いいな，と思ったりするのですが，どうしても，日常生活の中に溢れる，色や形や香や音に心を奪われてしまいがちです。

良い論文を書くのと同じくらいの熱心さで，美味しい珈琲を淹れようと思う。文献を捜すのと同じマメさで，美味しいパンを捜す。生活の中に息づく面白さ，そこに流れる時間を大切にしたいという思いは人一倍強いと思います。我ながら，いかにも小市民的だなあ，と思うと些か恥ずかしくもあります。

*

確かに私の暮らし方は小市民的かもしれませんが，身の回りの暮らしに強い関心を向ける生き方が，単なるマイホーム主義ということにはなりません。私のお話したような生き方はスケールが小さくて嫌だ，と思われる方もおいでだと思います。しかし，大きいか小さいかというのは，スケール，つまり尺度の取り方如何でしょう。先程触れたシュティフターという作家は，彼が好んで小さいものを描くという批判に対し，次のような比喩をもって答えています。それは，一言で言えば「牛乳沸かしの牛乳を吹きこぼすのと同じ力が，火山の溶岩を押し上げるのだ」という喩えです。

*

私が思い描く「豊かな生活」とは，それほど豪奢な生活を念頭に置いているわけではありません。むしろ質素といってよい生活です。質素な生活を如何に豊かに生きるか，これこそが私が『暮しの手帳』を通して学んだ

最も重要なことかもしれません。花森安治が好んで，時々使った言葉に，more taste than money というのがあります。花森自身と思われる訳によれば

「ベツニ オ金ヲカケナクテモ センスガアレバ タノシク暮ラスコトガデキル」

となりますが，これはどうやらアメリカの格言の一種のようで，なかなか含蓄のある言葉です。そういう生活を送るにはどういうやり方があるのか，それは『暮しの手帳』が創刊の時から提案し続けてきたことでもあるでしょう。『暮しの手帳』では，こういう提案をするときに，しばしば既成のやり方をひっくり返してみせるのですが，花森安治の素晴らしいところは，読み手がそれを真似するだけではなく，『暮しの手帳』がやってみせたように，読者自身も自分なりに既成のやり方や概念を吟味するよう求めてくるところかもしれません。それは真の意味での Do it yourself. だと思います。より良い環境を作り出すことは大事なことだとは思いますが，それと同時に，自分の環境を十分に味わいながら生きることは，もっと大切だということでもあります。

*

日常の些細な事柄に美を見出す。これは，絵画や写真のテーマにも，文学のモチーフにもなったことで，その具体例は色々な形で歴史の中に見出すことが出来ます。それは茶道の精神に通ずるところでもあります。美しさ，心地よさというのは人それぞれです。そういった生活を送るためには，個々人がそれぞれに考え，自分の暮らしに明確なイメージを持つことが必要なのかもしれません。花森安治が雑誌『暮しの手帳』を通して送り続けたメッセージとはそのようなものであったと思います。

*

日常生活に潜む美や感慨や心地よさ，暮らしの機微などを描いた作品は，洋の東西を問わずいろいろ挙げられるでしょう。先ほど挙げた，シュティフターの作品などもその一つです。近いところで，私の印象に残っている

ものとして，90 年代の半ばベストセラーとなった川上弘美の小説『先生の鞄』があります。私は，この作中の次の描写がとても気に入っています。作中のセンセイなる人物が飲み屋のカウンターで鮎を食べているシーンです。

「鮎をていねいに箸でほぐして食べはじめる。センセイの食べ方は，いつも懇切ていねいだ。（中略）鮎はすでに骨だけになっている。センセイは繊細なその骨を箸で一回つついた。きれいに身の離れた骨である。鮎，おいしゅうございました。センセイはサトルさんにむかって言った。」

なんでもない文章なのですが，この小説に登場するセンセイは，生活上のことを一つ一つ大切に，丁寧にこなします。この丁寧な暮らしぶりが私にはとても好ましい。自分が暮らしの中で出会う一つ一つの物事を愛しみ，いとおしむ姿に，何とも言えない優雅とゆとりを感じます。私も，こういう境地に至りたいものだと思っています。

*

今日の講義のはじめに，子供の頃に読んだ本にまつわる，エピソードをお話しました。こうして子供の頃を振り返ってみて，些かおめでたい纏め方かもしれませんが，自分らしい本を選んだなぁという感慨があります。元々，身の回りのモノに関心が強かった私が，それらの本を通じて身につけたのは，日常の世界を通してファンタジーの世界を見るという視線かもしれません。『くまのプーさん』にしても，『メアリー・ポピンズ』にしても，実生活が，そのままファンタジーの世界につながっているからです。

*

一つ一つのモノを，大切に扱うということは，一つ一つのモノに，それぞれの物語を読み取るということでもあります。如何に自分の生活にファンタジーを見出すか，それは，これからの時代にとても大切なことのような気がします。それが，いたずらに資源やエネルギーを浪費すること無く，

豊かな生活を送る鍵となりうるのではないか，独り合点かもしれませんが，私はそう思っています。

*

これで，私の話はお終いです。ご静聴ありがとうございました。

（2017 年 1 月 17 日矢上キャンパスにて）